

トラベルとトラブル

④ 天国の時間 ～紙式から水式へ～

もう20年以上も前になるだろうか、エジプトを旅した時のことだった。ホテルのトイレに入ったとき、洋式便器の中に一本の鉛管を発見したことがあった。鉛筆の太さくらいのそれは便座に座ったとき、肛門の直下あたりに開口部を上に向けて設置されていた。もちろんガイドブックにその説明はなく、はて何だろうかと首をひねるばかりだった。ふと目の前の壁に目をやると、そこには握りこぶし大のカラン。「もしや?」とは思ったものの、それ以上の詮索は止めて無造作にカランを回してしまった。途端にノズルから噴出した水が覗き込んでいた顔面に炸裂、それは肛門洗浄用の固定式シャワーだったのだ。当時の日本には肛門を洗浄するなどという装置は無く、びしょ濡れの顔やシャツを恨めしく思いながらも、発展途上国にこんな合理的なものがあるなんてと感心せざるをえなかった。

一般にイスラム圏のトイレは和式トイレと同じしゃがみ式で、用便後に右の傍らに置いてある手桶（ロタという小さな水差しでプラスチック製、なぜか赤、青、黄などの原色が多い）に水を入れ、それを左手にすくって肛門を洗うことから、イスラム圏では左手は不浄の手とされる。当初はその習慣に戸惑ったり、左利きはどうするのだろうかと思ったりしたが、郷に入らば郷に従えで、「手動洗浄」に慣れば紙を使うより清潔でさっぱりする。しかし、だからといってそのままパンツをはくと「尻を拭かない奴」で、下着は湿って気持ち悪いが悪い。やはり紙で「尻を拭いて」後始末をするのだが、紙を使わない国のトイレの配管は細いのだろう、また水勢も強くないから、うっかり紙を流すと詰まってしまうことがある。それを防ぐため使用後の紙を入れる缶が置かれているが、それが無い場合も多いから持ち帰り用のビニール袋は必携だ。

トイレトペーパーに対して不潔感が強い彼らは、紙を使わなければ洗浄後どうしているのだろうか。濡れたまま下着をつけてしまうのだろうか？ 知人のイラン人に聞いたところ、特に「尻は拭かない」という。乾燥した国ではすぐに乾くからとのことだった。そういえばと、テヘランで土産にとピスタチオ店に寄ったとき、ナッツ類の他に「柿の種」などの日本産の煎餅類がむきだしで山と盛られていたことを思い出した。「しけらないか？」との質問に、その意が分からなかったらしく怪訝な顔をしたオヤジは、しばらくして「ノープロブレム」と肩をすくめたのだった。

世界的に見ると排便後の肛門対処法は、おおまかに水を使うか、紙を使うかに分けられる。インドやイスラム圏などは水を使って洗う文化、欧米や日本は紙を使って拭く文化だが、一体どちらが清潔だろうか。

『トイレの話をしよう』（ローズ・ジョージ著、大沢章子訳）によると、「紙で肛門を拭くことは、衛生学的には乾いたティッシュで身体を拭いて、汚れが取り除けたと考えるのと同じくらい意味がない。人間の身体のもっとも不潔な部分を、もっとも効果のない方法できれいにしようとしている文化だ」と述べ、イングランド中南部のある町に住む約千人

の男性のパンツを調べた結果を引用している。それによるとほぼ全員のパンツが便で汚れていて、その程度は「ミツバチ色のシミ」から「かなりの大きさの、まぎれもなく便とわかるもの」まで多岐にわたっていたという。調査したキャメロン博士はこの結果に驚き、「大部分の人は、レストランのテーブルクロスについたトマトソースのシミ程度で、すぐに声を張り上げるが、一方では便で汚れたパンツのまま上質のソファに座り、贅沢な暮らしを楽しんでいる」と述べている。

ところで、中世のイスラム社会は都市文明が栄えたが、その基盤には共通言語のアラビア語、契約に基づく商取引、遊牧の伝統による物流などがあつた。「多種多様の共存と移動」(片倉もとこ)に集約されるイスラムは「都市の宗教」と呼ばれ、当時、辺境の地であつたヨーロッパに比べて、最盛時のバクダードの人口は100万人を超えたといわれる。

12世紀、2年間のメッカ巡礼の旅に出たグラナダ(スペイン)の書記イブン・ジュバイルは帰途ダマスカスに寄つた。そこではモスクの集会参加者に手当が支給され、孤児のため大きな教場が運営されていることを目にし、「もし地上に楽園があるならば、ダマスカスの中にあることには疑いがない。またもし天に楽園があるならば、ダマスカスと並んで競い合うであろう」と称賛した。「天国と比べられる豊かな町」「オリエントの真珠」「アラブの誇り」などといわれてきたダマスカスは「水の集まる場所」の意で、その水はすべての人に分け与えるのが義務とされ、今も市内の各所には水飲み場があり誰もが自由に飲むことができる。天国・楽園を意味するパラダイスは、堀や壁で囲った広大な園・庭を意味するペルシア語「パイリ・ダューザ」に由来するが、8世紀初頭、この地に建てられたウマイヤドモスク(完全な形で現存する世界最古のイスラム教寺院で、イスラム教第4の聖地)はまさにパラダイスそのもの、礼拝堂や回廊の壁面には樹木や草花・流水などが緑を基調としたモザイク画で描かれていた。

このような人口密集の都市文明が維持されるためには、衛生状態が良好であることが第一に挙げられるが、それを支えたのはイスラムの生活様式であつた。預言者・ムハンマドのハディース(言行録)には「清潔であることは信仰の半分を成就したことになる」とあり、汚いままの祈りは無効とされた。ムスリム(イスラム教徒)は礼拝に際して体を清めることを義務づけられ、清潔な流水で体を洗う習慣は小さい頃から始められる。一日5回の礼拝の都度、まず手を洗い、口をすすぎ、次に鼻、顔、肘、頭、耳、足、趾間の順序で身体を丁寧に洗うとあれば、おのずと人々は清潔になるだろうし、その延長線上で用便後に肛門を洗うという習慣もごく自然に生まれたのだろう。乾燥地帯に栄えたイスラムの都市空間は、病原菌の繁殖・伝染の抑制された清潔な環境だったのだ。

近年になってイスラム圏に洋式便器が導入された際、手動洗浄は中腰で行わざるをえなかったが、しかし、その姿勢では疲れるし安定も悪い。そこで考え出されたのが、洗浄用の管を便器内に設置することだった。ただ、露出したままのノズルには糞便が付着するから、最近では陶器部分から直接洗浄水が噴出する新機種も登場している。一方、しゃがみ式便器では傍らにハンドシャワーが設置されていることが多く、それは用便後に股間に入

れて使われる。

いずれにしてもイスラム圏のトイレは紙を使わないためスッキリしていて、しかも日本の公衆便所で見かけるような落書きは見られない。特に少量の水しか使わない手動洗浄式は清潔・省エネ・簡便で、これは世界に誇れるトイレ文化だろう。

野糞を通してエコロジー活動を実践している糞土師・伊沢正名氏は、屋外で用便の際はまず葉っぱで拭き、仕上げに水を使えば200cc位の水で十分という「伊沢流インド式野糞法」を確立したが、「いったん肛門を水で洗う清々しさを覚えてしまうと、紙で拭くだけではどうにもスッキリしなくなった。いや、乾いた紙で拭いただけでは、ウンコは確実に残っているはずだ。それ以降トイレを使って紙で拭いたときには、最後はちり紙を水で濡らして拭き上げた」（『くう・ねる・のぐそ』より）と述べている。この方法でキレ痔も治したという彼は、水洗トイレで使う水量は1人一日平均数十リットルになり、日本全体では数十億リットル、つまり数百万トンの水を毎日トイレに流して、清流を潰してダムを造っている現実に警鐘を鳴らしている。

実際、水洗トイレで使う水量は多く、一回の洗浄に13リットル以上もの水を使っていたアメリカでは、90年代初めにいくつかの州で水不足がおこり、その結果、エネルギー政策基本法が成立した。アメリカの各家庭で使用する水の半分近くがトイレの水であることから、一回の洗浄に6リットル以上の水を使ってはならないとされたのだった。その際の節水型トイレの需要に便乗した日本のTOTO（「東洋の陶器」から命名された）は売上を伸ばしたが、もちろんアメリカのトイレメーカーも便器改良に努力を怠らなかった。その実験に不可欠な「ギジオブツ」（作りものの排泄物）に最適なものは何か？ 当然のことながらTOTOが企業秘密を教えてくれるわけではなく、浮力や密度が人間の便に限りなく近いものを求めて、試行錯誤の末にたどり着いたのが味噌だった。ギジオブツにぴったり味噌を扱う輸入業者に、開発担当者が250キログラムの注文を出したところ、喜んだ業者は何軒のレストランを経営しているのかと尋ねた。トイレの性能テストのためと聞いて、それなら売らないと態度を変えたのも、アメリカ人の業者にも「味噌糞一緒」のイメージがあったからだろう。味噌メーカーの名を出さないことを条件にやっと交渉は成立、一回の平均的な糞便の重さに関しては、ランセット（イギリスの医学誌）に250グラムの数字を発見したのだった（『トイレの話しよう』より）。

ところで、日本人は神社仏閣を訪れるとき、手水舎の浄水で口をすすぎ手を洗う。入浴の際はまず体を洗ってから湯舟に入る。罪や災い、死、体外へ出た血液など、穢れを忌避する清浄・清潔な神道文化は、豊かな水に支えられて生まれたが、ならば肛門も洗うという文化が定着してもよかったのではないか……。

実際、日常茶飯の生活のすべての中に宗教があるとするとする曹洞宗では、食事を作るのも食べるのも修行、もちろん掃除や洗顔、排泄行為なども例外ではない。例えば、厠に関しては、入る前にまず着衣を正し、浄桶（水桶）に水を汲み草履を履き替え、中に入ってはもちろん歌ったりおしゃべりなどをしてはいけない。排便後は箆か紙（字を書いた紙は用い

ない)を使い、その後、右手の浄桶から左手に水を受け、まずは尿道口を、次に肛門を三度つつ洗うというのである(立松和平『道元禅師』より)。

このような規則正しい齋戒沐浴によって僧侶たちの心身は清潔に保たれ、一汁一菜の粗食でも厳しい修行に耐えられたのだろうが、世間に普及した精進料理に比べこの肛門洗浄習慣は何故か普及しなかった。

一般に清潔な印象のあるイスラム圏のトイレに比べると、中国のトイレは積み重なった排泄物に銀バイが群がり、落とし紙は周囲に散乱、時には紙が壁に張り付いたりしている。そのおぞましさに中国旅行を敬遠する人も少なくないが、しかし田舎や辺境の地はともかく、北京オリンピック以降の最近では、都会地のトイレは見違えるように清潔になった。2008年の北京オリンピックに際しては、市内を浄化しようと文明化運動が展開された。ツバを吐くことや無作法な振る舞いの撲滅を目標にかかげ、公衆トイレのほとんどなかった市内に、だれもが徒歩5分で清潔なトイレに到達できるよう、五千個を新設するか改装したという。ただ中国人はどうやらハンカチを携帯する習慣はないらしく、杭州市内の公衆トイレで「ハンカチを持とう、日本人に見習おう、トイレでは紙一枚を」の標語を目にしたときは、「そんなに買いかぶられても・・・」と気恥かしく思ったものだ。

中国の隣国・草原に暮らすモンゴルの人々は決まった場所に排泄しない。彼らは家畜の飼料を求めて移動していくが、常に移動しているわけではなく、周辺の牧草が少なくなるまでの一定期間は、組み立て式のゲル(円形のテント状家屋で風に強い)に居住する。排泄はゲル周辺の青空トイレ、その際、彼らは既存の糞便の上に決して排泄しない。さえぎるものとなない大草原の中ではわざわざそんな気色の悪いことをする必要がないからだが、多分これは自然界ではどの野生動物も同じだろう。文明社会で人間の排泄場所(トイレ)が決められているのはそれが必要不可欠だからで、もしも人間が野生に帰れば同じ場所で排泄することはあるまい。実際、我が家の飼い猫は猫用トイレで排泄するが、忙しさにまけてうっかりトイレ掃除を怠ったときは、己の糞尿の上で排泄なんてできるかと、絨毯の上などを汚してしまう。

遊牧民の定住期間中、彼らのゲル周辺は次第に人糞や家畜糞で汚れ、青空トイレの可能空間は狭まっていく。衛生状態の悪化は命の危険に結びつくから、周辺の排便による汚れと牧草量の減少を勘案して次の牧草地へと移動する。モンゴルに伝染病がほとんどないといわれるのは、人口密度が低い上に汚染地には長く留まらず、また死んだ動物はハゲタカやハイエナなどの「自然の医者」がきれいに片づけてくれるからという。

モンゴルと同じチベット文化圏に属するヒマラヤ南の小国ブータンは(九州くらいの面積)、インド文化の影響も大きくトイレは水式と紙式が混在している。紙式で印象的だったのは空中トイレで、それは防衛に有利な険しい山の斜面に建てられたゾン(僧院でもあり城塞でもある)に見られた。立地条件が悪いためトイレは出窓形式で、床の穴を覗けば地面は20~30メートル下、強風に舞った使用後の紙は近くの木々の枝に辛夷こぶしのような花を咲かせ、聖なる天上の僧院の下は日々の営みの産物が堆積した俗なる世界だった。

昔、エジプトで固定式洗浄便器に接してから幾星霜、日本では今やハイテク電動温水洗浄便座が全盛で、一家に一台のパソコンを持つ家庭よりも普及した。日本のトイレ市場の三分の二を占めるTOTOはすでに二千万台以上の「ウォシュレット」を販売、今年は生誕60周年という。内閣府の調査によると2005年にはハイテク便座は約50%の普及率で、和式トイレの製造はわずか3%にまで落ち込んでしまった。六十年位前まで、「汚い」「暗い」「臭い」「怖い」の4Kの「臭いものに蓋」をした汲み取り便所で、冬は寒さに震え、夏はアンモニア臭が鼻を突く中、ウジ虫の動きに目を見張り、しゃがみ姿勢に足はしびれ、時には新聞紙を揉んで使っていた日本人は、今やアロマの香る中、冬は暖かい便座に座り、暖かい水で肛門を洗って、快適で明るいトイレ生活を送っている。このハイテク便座のオリジナルは、きっとイスラム圏のあの固定シャワーだったのだろう。それにヒントを得た日本人が現在のハイテク便座を開発したのだろうが、日本のビジネスホテルにも常設されるようになったそれも、私の少ない経験では未だ海外のホテルで見たことがない。アルゼンチンではブエノスアイレスで泊まった五つ星ホテルにもそれはなかったが、そのロビーで見た郊外のリゾートマンションの宣伝用パンフレットには、日本製ハイテク便座が売りの一つとして写真付きで大きく紹介されていた。

しゃがむ文化から座る文化へ、拭く文化から洗う文化へと、日本人のトイレ習慣・環境は短時間で激変し、4Kの地獄の時間は天国・極楽の時間に変わった。人は一生の間に3年間をトイレで過ごすといわれるが、日本人は生存中に3年間もの天国の時間を手に入れたのだ。現在、世界中で26億人もがトイレのない生活をしていることを思えば、このトイレ革命がいかに素晴らしいものか、この幸運は大いに感謝せねばなるまい。

ハイテク便座は必要時にノズルが露出し、瞬時にお湯が飛び出すようになったが、この技術の開発には涙ぐましい努力が隠されている。例えば、TOTOのウォシュレットのノズルの角度は43度、これは洗浄後のノズルにお湯が一滴もかからない角度だそうだが、その角度を調べるために人間の平均的な肛門の位置を把握する必要があった。嫌がる社員の協力をもとに得たのは、男性の肛門の位置は便座の前から27~28センチ、女性の肛門と局部の距離は3センチというデータだった。一方、TOTOのライバルのINAX「シャワートイレ」のノズルの角度は70度、この角度が最も発射力が強く狙いも正確だという。多大な努力なしに製品の完成は無いのだろうが、それにしてもである。女性の肛門と局部の距離が3センチだなんて、解剖学の教科書を紐解いたが発見できなかった。

日本で普及したハイテク便座は、経済成長著しい中国でも人気上昇中で、中国の航空会社の機内誌にもその広告が見られるが、しかし欧米の市場では苦戦中という。日本では「おしりだって洗ってほしい」というCMで急成長したTOTOだが、二匹目のドジョウを狙って「清潔は幸せ」キャンペーンを張ったアメリカでは成功しなかった。「貴方がたは不潔だ」というメッセージは彼らに拒否されてしまったのだ。一方、「何百年に渡ってパリは女性を買いに行く場所で、肛門の洗浄は不品行を連想させる」という歴史的・文化的背景が、

陰部洗浄に対する罪悪感を生じさせたからともいわれる。現在、TOTOは有名人を目標に販売戦略を繰り返しているが、それはマドンナが2005年、12年振りに来日した折りの「日本の暖かい便座をまた使えるのが楽しみだ」との発言を受けたからという。

ハイテク便座の普及に伴って、最近の日本の小学校では学校で排便したがないという子どもが増えているという。筆者の住む近くの小学校では上級生がトイレ清掃をする決まりだが、和式トイレの使い方を知らないのか下級生が便器を汚して困ると聞いた。トイレが汚ければ児童の足は遠のくだろうし、また幼い頃から家庭の洋式トイレに親しんできた子どもたちにとっては、洗浄便座のない和式は使用勝手が違うため使いたがないのかもしれない。しかし、学校で排便出来ないような潔癖病では学校生活に支障をきたすだろうし、そもそも世界から見ればハイテク便座の普及は極めて特殊なことで、この際「適応・順応」を学ばせることも教育の大切な役割だろう。

最近、臨床の現場で肛門周囲炎が増えているのは、ハイテク便座の普及と関係があるのではといわれる。肛門のジメジメや痒みを訴える患者さんで、肛門周囲のただれ、色素沈着、皮膚の肥厚などを認めるのは、清潔がベター、いやベストと思って手入れをし過ぎた結果ではないだろうか。何度も拭いたり洗ったり消毒したりすると皮膚が傷つき、リンパ液が漏れてジメジメする。それを不潔だと思って更に手入れをするとまた悪くなる。洗浄し過ぎて常在菌が減ると肛門粘膜は中性化し抵抗力が低下するが、それは常在菌には皮膚の脂肪を分解して弱酸性に保ち、有害菌の感染を防ぐ働きがあるからだ。

若い女性に膣炎が増えているのも、肛門洗浄と同様に膣の洗い過ぎといわれる。膣にはデーテルライン乳酸菌が住んでいて、それが膣を酸性にして雑菌の繁殖を抑えているが、そこを洗い過ぎれば乳酸菌が減って中性となる。結局、雑菌が増えて膣炎となり、おりものが増えるというわけだ。妊婦の膣炎の治療にプレーンヨーグルトが有効だったというイスラエルの報告によると、市販のヨーグルト10～15ccを膣内に注入したところ、治療開始2日目には全例で分泌物の悪臭は改善され、治療経過も抗生物質使用群よりはるかによかったという。何も不潔が良いというわけではないが、何事も「過ぎたるは及ばざるがごとし」である。共生関係が乱されないような適当さが「いい加減」、つまり「加減が良い」ということだろう。